

語り継ぎたい民話・童謡のふるさと 大分

大分県教育センター
牧 英治郎



はじめに

「大分県は、海も山も青く清く、温泉も人情も温かい所だ」と、私はいつも人に自慢しています。今回は、「語り継ぎたい民話・童謡のふるさと」をテーマに、車でまわった三か所を紹介します。

大分県は、もともと小さな藩が、数多く分立していました。そのため、各地に名所・旧跡が点在しており、複数の場所をまわるのなら、車での移動が便利です。車で移動すると、山際の道や複雑な入り江などの地形によって、小藩が分立しやすい土地柄だったことも実感できるでしょう。

民話「吉四六さん」のふるさと

「吉四六さんと庄屋さん」という本が、四年生下巻にある読書教材『お笑いけいじ板』を作ろう」の中で紹介されています。

この「吉四六さんのふるさと」は、「野津



町」です。市町村の合併によって、現在は臼杵市になっています。「野津町」の入り口を示す国道沿いの標識には、「吉四六さんの天登り」が、絵に表わされています。さらに、すぐそばの橋のたもとには、かわいらしい吉四六さんの石像が、野菜のごをかついで立っています。

さて、この吉四六さんですが、実在した人物がモデルであったともされています。その人物の名前は、「廣田吉右衛門」といいます。



「吉四六さん」のお話では、とんちをきかせて多くの人をやりこめたり、悪ふざけやおとぼけで失敗をごまかしたりする「吉四六さん」の姿が目立ちます。

しかし、吉四六さんが、そのような本当に「ずるい」だけの人だったのであれば、このように人々から愛されて語り継がれることもなかったでしょう。ですから、廣田吉右衛門の銅像は、明るい微笑みを含んで、声たからかに叫んでいる姿なのだと、私は思っています。



童謡詩人「佐藤義美」のふるさと

次に車で向かったのは、竹田市にある「佐藤義美記念館」です。佐藤義美の名を知らない人も、「いぬのおまわりさん」という童謡は、聴いたことがあるでしょう。この童謡を作詞したのが、竹田市で生まれた佐藤義美です。五年生下巻「みすゞがしの旅」の中にも名前が出てきます。



佐藤義美記念館の開館行事には、全国から児童文学にかかわる人々が集まってお祝いしたようです。館内に飾られている当時の写真を見ると、「まど・みちお」「阪田寛夫」「神沢利子」「武鹿悦子」「矢崎節夫」など、児童文学を代表するかたがたの姿が写っています。このことから、佐藤義美が、児童文学界に多大な功績を残していることを感じます。



この記念館は、佐藤義美が晩年を過ごした、神奈川県逗子市の建物を再現したものです。大正時代のロマンを感じさせる、洋館風の本造二階建てになっています。

二階の展示室には、佐藤義美の着用した衣服・直筆の原稿・作品・著書などが、展示・説明されています。

童謡詩人として知られている佐藤義美ですが、青年期の詩や童謡にも捨てがたい作品が多くあることがわかったと思います。



展示室の隣は、佐藤義美が晩年を過ごした住まいの書斎を忠実に復元した部屋となっています。書棚には、義美の蔵書が収められており、執筆活動していた当時の空気が漂っているかのようです。

作曲家「瀧廉太郎」のふるさと

最後に車で向かったのは、同じ竹田市にある「岡城跡(趾)」です。

本丸跡あたりまで登ると、きつい山の斜面のさらに上へと積みあげられたいくつもの石垣跡を観ることが出来ます。この山城が、自然の要害を生かして造られたことがわかると思います。

瀧廉太郎は、この岡城跡をイメージして、あの



名曲『荒城の月』を作曲したのではないかとされています。この城跡に登り、眼下に広がる山間の景色を眺めれば、そのこともうなずける気がします。それで、岡城跡の本丸跡近くには、瀧廉太郎の銅像が建立されているのでしよう。



この銅像と「荒城の石垣」をあわせて観たときに、自然と『荒城の月』のメロディーが脳裏に浮かぶのは、きっと私だけではないはずです。

おわりに

今回は、臼杵市野津町と竹田市だけの紹介になりましたが、臼杵市には、「野上弥生子」の記念館もあります。ほかにも、「福澤諭吉」「久留島武彦」「三浦梅園」「広瀬淡窓」など、先達にゆかりの見所が、県内各地にあふれています。ぜひ、一度といわず何度でも大分の地を訪れてください。そして、文学の旅の疲れを「日本一」の温泉で癒しながら、「ふるさと大分」にひたつていただきたいと思います。